特集：多様化する福祉

地域社会における子育てサークルの実態とその継続性に関する研究

―神奈川県川崎市多摩区を事例地域として―

吉江　明日菜

Ⅰ　はじめに

日本では，深刻な少子化が将来的に生産年齢人口を減少させ，経済発展の支障になることへの危惧から，1990年代を通じて就労家庭を対象とする子育て支援策が実施されてきた．しかし，少子化に歯止めがかからなかったことに加えて，2000年頃からは在宅家庭においても子育てに関して様々な問題がみられるようになった．ここに来て，在宅家庭も対象とした子育て支援の必要性が指摘され，全ての子育て家庭を対象とする包括的な支援が求められはじめた．子育て支援は新たな局面に移行したといえる．

そこで，近年の政策動向をみると，2004年に閣議決定された『少子化社会対策大綱』に基づいた重点施策の具体的計画が策定された．注目すべき点は，重点課題の一つに「子育ての新たな支え合いと連帯」が定められ，地域住民による主体的な子育て支援の促進が具体的施策として取り上げられたことである．さらに，2007年には内閣官房長官を議長とする『子どもと家族を応援する日本重点戦略検討会議』の答申があり，「全ての子どものすこやかな育成の基盤となる地域の取り組み」を支援することが次世代育成支援の柱の一つになった．つまり，子育て支援は，保育所や家庭という枠組みを越えて，地域をベースに社会全体で取り組むものとして位置づけられたのである．以後，行政の他にも地域組織や市民活動団体などの様々な主体が協働しながら子育て支援に取り組む体制を地域に築くことが求められるようになった．このような状況において，地域住民が子育て支援の新たな担い手として期待されはじめている．

地域住民が主体的に取り組む子育て支援の一つに子育てサークルがある．子育てサークルは，子育て中の親たちが子どもを連れて集まり，子ども同士を遊ばせながら，学習や情報交換をしたり，運動会やクリスマスなどの行事を共同で実施したりするグループである（厚生省 1998）．もともと近所に知り合いが少なく，子育ての喜びや悩みを誰かと一緒に共有・共感したいと思っていた都市に暮らす母親たちがはじめた活動であり，育児不安の軽減や育児に関する学習効果があるとされる（住田・溝田 2000）．子育てサークルへの参加は母親たちの自己防衛手段でもあり，ピアカウンセリングの効果があるという（原田ほか 2002）．

また，近年の子育てサークルは，公私の関係や価値観，セクション，専門の違いを越えた協同・協働に基づく活動が特徴とされる（小木 2000）．さらに子育てのためのコミュニティ形成には，地域全体で子育てに取り組む姿勢が大切であり，地域の子育てを支える市民の主体性や社会性を涵養することも重要とされる（寺田 2005）．その点，子育てサークルは自主的な市民活動に発展する可能性を含んでおり，そのため子育てにおいて重要とされる「当事者主権」や「公共性の主体」を生み出すことが期待されるのである（大束ほか 2005）．

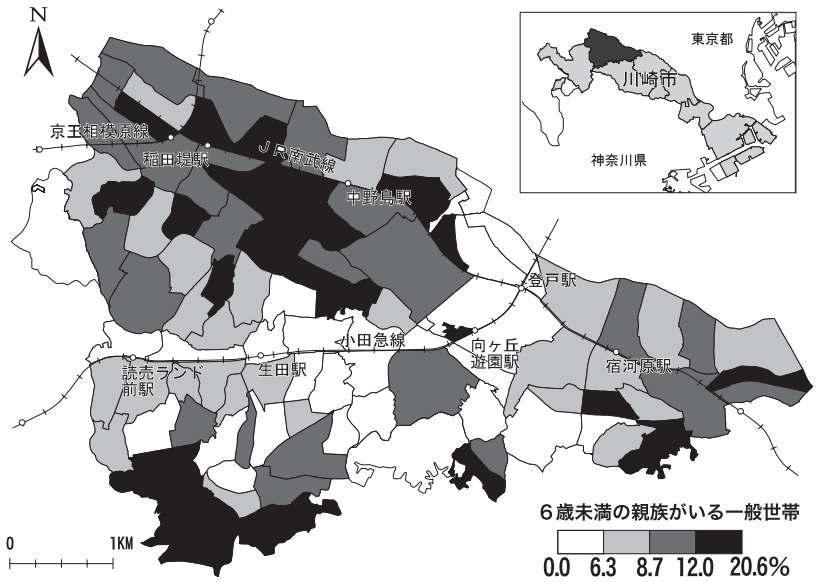


図１　川崎市多摩区における６歳未満の親族がいる一般世帯比率

（2005年国勢調査より作成）.

本研究では，以上のことを踏まえて，子育て支援ならびにその枠を越えた地域づくりに欠かせない存在として注目されている子育てサークルを取り上げ，その活動実態や子育て支援における役割，活動の継続に向けた課題を明らかにするとともに，サークル活動が子育てのためのコミュニティ形成に展開する可能性について考察する.

II　対象地域と研究方法

本研究の対象地域は，神奈川県川崎市の北西部に位置する多摩区である（図１）．多摩区は，多摩川をはさんで東京都に隣接しており，交通の利便性から住宅地域として発展してきた．2010年９月末日の住民基本台帳による区の人口は204,818人であり，年少人口が12.7％，生産年齢人口が71.5％，老年人口が15.8％を占めていた．また，世帯数は99,399世帯であった.

本研究では，育児期にある世帯を未就学児を持つ世帯とし，国勢調査において多摩区の６歳未満の親族がいる一般世帯数をとらえたところ，1985年以降8,500世帯以上を維持しており，当該世帯は，区北部の中野島駅ならびに稲田堤駅付近や隣接する麻生区との境界に近い区の南西部，宿河原駅周辺の区南東部に多い．2005年の国勢調査によると，当該世帯の91％は夫婦と子どもからなる核家族世帯であった．また，６歳未満の子どもがおり，夫が被用者の世帯のうち72.6％は妻が就業しておらず，専業主婦率が高い．さらに，既婚男性雇用者に占める長時間労働者（週60時間以上勤務）の割合は19.5％であり，この値は全国的にみても高い（武田ほか編 2007）.

以上から多摩区の子育て世帯は，「夫は仕事，妻は家庭」という性別役割分業に基づく世帯が多く，子育てに専念する女性が多いといえる．特に近年では，世帯の核家族化が進み，さらに大都市圏郊外の特徴として住民同士の交流やつながりが希薄になりがちであることも予想されるため，子

表1　調査対象となった子育てサークルの概要

サークル	A	B	C	D	E	F	G	H	I
地区	北部	南西部	南東部	南西部	北部	南西部	南西部	南東部	北部
結成時期	2009年	2010年	2000 年 以前	1989年	1990年頃	2007年	2000 年 以前	1982年頃	2000年
対象児童	未就学児	未就学児	未就園児	未就園児	6か月～未就学児	未就学児	未就園児	未就園児	未就園児
参加親子数	4組	10組	6組	16組	14組	21組	15組	8組	11組
活動日(曜日)	月～金	第1水	火・木	木	第2・4火	月2回月	第1・3月	第2・4木	月・木
活動時間	10:00 ～14:00	10:00 ～12:00	10:30 ～12:00	10:00 ～12:00	10:00 ～11:30	10:30 ～12:00	10:00 ～11:30	10:00 ～12:00	10:00 ～12:00
主な活動場所	街区公園，プレーパーク，都市公園	街区公園，都市公園	街区公園	街区公園，団地集会所	団地集会所	こども文化センター	街区公園，こども文化センター	植物園，子ども文化センター	都市公園
主な活動内容	公園遊び，サイクリング，季節行事	公園遊び，料理，季節行事	公園遊び	公園遊び，工作，読み聞かせ	室内遊び，ピクニック，季節行事	室内遊び，季節行事	リトミック，公園遊び，季節行事	公園遊び，工作，季節行事	公園遊び，季節行事，遠足
広報・勧誘手段	ポスター，口コミ，公園で声かけ	口コミ(幼稚園で)，HP	口コミ，公園で声かけ	ポスター，口コミ，公園で声かけ	ポスター，口コミ	口コミ(幼稚園で)，ポスター	ポスター，口コミ，公園で声かけ	ポスター，口コミ，公園で声かけ	ポスター，口コミ，公園で声かけ
連絡手段	電話，メール	メール	メール	メール	メール	メール	メール	メール	メール
役割分担(任期)	無し	有り(1年)	有り(1年)	有り(1年)	有り(1年)	無し	有り(1年)	有り(半年)	有り(1年)
スケジュール決め	月例ミーティングで	会長が決める	当番が決める	年間計画決めの時	年度始めにアンケート	会長が決める	年間計画決めの時	その時の当番がきめる	年3回ミーティングで
他サークルとの交流	有り	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し
会費	月3,500円	半年900円	年1,200円	月100円	半年1,200 円	月500円	年1,200円	半年100円	年4,000円
助成金	社協	社協	無し	無し	社協	社協	区役所	社協	社協
卒会者との交流	特になし	特になし	有り	有り	特になし	特になし	特になし	特になし	有り

（インタービュー調査より作成）.

育て期の母親が大きな負担感や孤独，不安を感じていることが想定される．これらの理由から多摩区を本研究の対象地域に選定した．

本研究では，多摩区の子育てサークルを対象に，①参加者へのアンケート調査と，②代表者へのインタビュー調査ならびに活動の観察を行った．①の調査は参加者の特徴やサークル参加の効果と評価，現在の子育てを取り巻く環境を明らかにするために，②は活動内容や運営の実態を把握するために実施した．また，補足調査として行政の子育て支援担当部局の職員にもインタビューを行った．

調査対象の子育てサークルには，多摩区が刊行する『多摩区子育て BOOK 2008年改定版』（多摩区子育て BOOK 編集委員会・NPO 法人ままとんきっず 2008）に掲載されている27サークルから，

活動地域に偏りが生じないことを条件に複数のサークルを選定したが，最終的に調査協力を得られたサークルは 9 団体であった．調査は2010年10月29日から12月13日の期間に，サークルの活動中または活動後に実施した．なお，アンケートの最終的な回答数は63件であった．ケース数が少ないため，質問に全て回答していないケースも集計に含むことにした．ゆえに，以下で示す集計結果には非回答のケースが含まれており，回答率の合計が100％にならない調査項目があることを前もって指摘しておく．

Ⅲ　子育てサークルの参加者特性と参加による効果

1．調査対象サークルの概要

調査の対象となった 9 団体の概要を表 1 に示した．対象のなかには30年続いている歴史のあるサークルがある一方で，再結成も含めて近年になり結成されたサークルもある．未就園児（ 3 歳児または 4 歳児）を参加対象とするサークルが多いが，未就学児（小学校入学前）までを対象とするサークルもある．週に 1 ～ 2 回，または月に 2 回の頻度で，午前中に活動するサークルが多い．ほとんどのサークルは，活動に公園やこども文化センター（児童館）を利用している．多摩区には，公共施設や公園が多く存在するため，活動場所の確保は比較的容易な状況にあると考えられる．

活動内容は，活動日によって様々だが，どのサークルも必ず公園遊び（特に決まったプログラムなどはなく，子どもたちを自由に遊ばせる）が設定されている．ただし，公園遊びと他の活動（落ち葉ひろいやフォトフレーム作製など）をあわせて行うサークルもある．室内の活動はあらかじめ内容が決められており，対象サークルでは工作やリトミック（体操），クッキングなどを行っている．また，多くのサークルで季節ごとの行事（クリスマス会や遠足）がある．これらの活動や行事に関する連絡も含むサークル内の連絡手段には，主にメールが使用されている．

サークル活動に対しては，区と社会福祉協議会から助成を受けることが可能であり，社会福祉協議会の母親クラブに加入し，助成金を受けているサークルが多い．区からの助成は，金額は大きいが条件や審査が厳しいため，申請しているサークルは少ない．

サークルの組織体制をみると， 2 団体を除いて役割が分担されている．基本的に，会長・代表，副会長・副代表，会計，活動当番の役割が設けられており，サークルによっては文書係やお誕生日係などの担当がある．任期は1年間の団体が多い．また，活動日ごとに役割が異なるサークルもある．会長・代表は担当者が一番決まりにくい役割であり，立候補はまずみられないため，前会長の推薦で決まることがほとんどである．ただし，妊娠時など負担が大きい人は役割が免除される．

新メンバーを集めるための広報・勧誘活動については，友人・知人のネットワークを利用した口コミのほかに，公園デビューした親子や乳幼児検診時に一緒になった親子に声をかけて勧誘している．ポスターの掲示は行うがあまり効果がないという．なお，卒会した親子と交流しているサークルもあり，イベントへの参加や保育協力者として活動の支援を得ている．

2．サークルの参加者特性

調査対象サークルでは，調査対象サークルの参加者は総計63組の親子で母子62組，父子 1 組（父親の職業は自由業）である．親（以下，単に参加者と呼ぶ）の年齢は，20歳代が9.5％，30歳代が65.1％，40歳代が20.6％であった．加入時期は，何人目の子どもの時かを訊ねたところ， 1 人目の時が74.6％， 1 人目が17.5％である．加入時の子どもの年齢は， 1 歳未満が14.3％， 1 歳が34.9％，2歳が19.0％， 3 歳以上が22.2％であった．参加年数は， 1 年目が34.9％， 2 年目が25.4％であり，

2年以下が過半数を占める．世帯構成をみると，子どもの数は，1人が44.4％，2人が46.4％であり，それ以上は少ない．また，親世代と同居している人は6.3％であった．

参加者のうち就業者は11.1％（全てがパートタイムまたはアルバイト）と少なく，大多数は専業主婦であった．育児休業中の人（3.2％）を除いて従前の就業形態を調べたところ，フルタイムが70.2％，パートタイム・アルバイトが21.1％であった．就業状況が変化した時期は，出産時が54.4％，結婚時が36.8％であった．一方，配偶者の就業形態は，フルタイムが92.1％であり，朝7時から8時に自宅を出て，夜22時から24時に帰宅する人が多い．配偶者は家庭外で過ごす時間が長いため，家事・育児は主に参加者が担当している．

居住地から活動場所までの移動と所要時間は，徒歩または自転車で20分未満の移動を要する人が72.0％と多く，20分以上の移動を要する人や自動車を利用する人は少ない．住宅はマンションに住む人が49.2％と多く（分譲が23.8％，賃貸が25.4％），戸建ての持ち家が31.7％，アパートが15.9％であった．多摩区での居住年数は，2年未満が6.3％，2年から3年未満が14.3％，3年以上が76.2％である．従前の居住地は，川崎市内が23.8％，首都圏（川崎市内を除く神奈川県内，東京都，埼玉県，千葉県）が52.4％，その他の地方が15.9％であり，首都圏からの転入が76.2％を占めている．また，参加者の出身地をみると，首都圏出身者の割合は65.1％と過半数を超える．また，今後多摩区に住み続けたいという人は55.5％であり，住居のタイプとの関係では戸建ての持ち家の人に当該回答が多くみられた．一方，今後の居住地は分からないという人は，分譲・賃貸を問わずマンション居住者に多かった．

別居親族との交流をみると，頻繁に交流のある親族は，自分の親という人が69.9％であり，配偶者の親や兄弟・姉妹を大きく上回っていた（図2）．ただし，最も交流のある親族の居住地までの距離を移動手段と所要時間からみると，徒歩または自転車，自動車で1時間未満という人は31％にとどまり，それ以上の時間または電車や飛行機の利用を要する人が多かった．また，交流頻度は，月に1回から3回の人が41.3％と多く，年に1～2回が20.7％，週に1回から3回が15.8％，2～3カ月に1回が12.7％と続く．週に4回以上と高頻度で交流がある人は4.8％と少なった．主な交流目的は，年末年始のあいさつが36.5％，子守りをお願いするが34.9％，子育ての相談をするが28.6％，節句のあいさつが15.9％であった．た

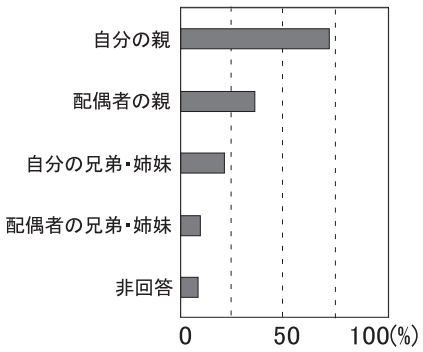


図2　頻繁に交流のある別居親族

（アンケート調査より作成）．

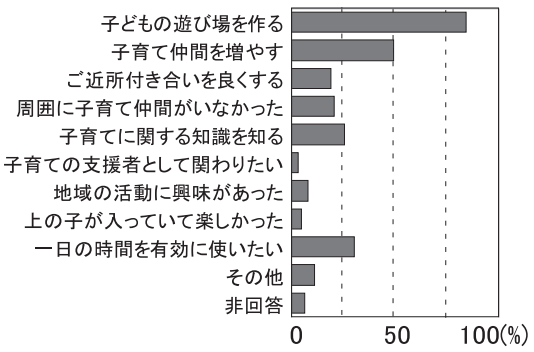


図3　子育てサークルへの参加目的

（アンケート調査より作成）．

だし，子育ての相談には電話やメールの使用も想定される．

以上のことから調査対象サークルの参加者は，30・40歳代の首都圏出身者で，結婚や子育てをきっかけに仕事を辞め，現在は家庭で家事と小さい子どもの養育を担っている専業主婦が多い．配偶者は，勤務の関係で家事を担うことが難しいため，参加者が家事・育児をもっぱら担当している．また，首都圏から転入した，親世代とは別居している世帯が多く，別居親族とは距離があるため毎日直接会うことは難しい．別居親族との交流は，子どもの顔見せや年末年始・節句のあいさつを目的としており，子守りも必要に応じてお願いをする程度の頻度と考えられる．

このように，子育てを親世代と一緒に行うことが難しく，自分が病気になったり，子育てに疲れてしまったりした時に，すぐに会って子育てを手助けしてもらうことができない可能性の高い，つまり「自分の力のみで育てる」ことが前提の母親が，1人目の子どもが小さいころに自宅の近くで活動する地域の子育てサークルに参加していると考えられる．

3．サークルへの参加状況とその評価

サークルに参加したきっかけは，友人や知人の紹介が65.1％と多く，掲示板のポスターをみて（12.7％）などの他の回答を大きく引き離している．参加の目的は，子どもの遊び場を作るが84.1％と最も多く，ほかも子育てに関する回答が多い（図3）．ただし，一日の時間を有効に使いたいや，近所付き合いを良くすると回答した人も比較的多くみられた．現在の参加状況をみると，ほとんど参加している人が63.5％，半分くらいの参加が22.2％であり，回答者の参加率は概して高い．とりわけ公園遊びといった事前準備の必要がない，気軽に参加できる活動への参加率が高い．サークル内の役割に関しては，もともと役割分担のないサークルを除くと，現在自分に役割があると答えた人が66.0％，現在自分には役割がないと答えた人は33.9％であった．特に，現在役割をもつと答えた人は，それにより活動が充実していると回答していた．

サークル活動が子育てに与える効果に関しては，とても役立っていると答えた人が63.5％，まあまあ役立っている人が27.0％，あまり役立っていない人が1.6％であり，役立っていると答えた人が9割を占めた．特にサークル参加によって子育てに関する悩みが減ったと回答する人が71.5％おり，減らなかった人の15.9％を大きく上回った．自由回答での具体的な意見をみると（表2），子どもの発達やしつけ，病気，接し方などの「子育て中の悩み」や，幼稚園や地域のことなどの「子育て情報に関する悩み」が軽減されたという．ただし，「子育てに関する悩みは子どもの成長とともに変化していくもの」や「悩みは全て解消されるのではなく，共有することで気分が楽になる」という意見もみられた．

また，サークルへの参加により友人の数が増えたという人は82.5％と多く，サークルでできた友人が子どもの発育・成長や子育てに関するノウハウ・知識に関する相談相手になっている人も8割を超えていた．さらに，参加の前後を比べると，近所の人を子育ての相談相手とする人が参加後には倍増していた．

サークル活動に対する評価として，活動を継続してきたことを，よかったと回答する人は92.0％と多い．自由回答の具体的意見には（表3），「子どもの成長に関するもの」や「自分自身の成長に関するもの」，「子どもとの日常生活や子育て情報に関するもの」があった．ただし，サークル活動になじめなかったり，準備が大変など，サークル内での人間関係構築の難しさやサークル運営に関する悩みを抱えていると回答する人もいた．

今後に関しては，子どもが対象年齢を過ぎたらサークルをやめたいという人が38.1％を占めており，活動に関わり続けたい人の17.5％を上回っ

表2　サークル参加により軽減された主な悩み

子育て	・子どもの発達．意見交換もできるが，差を見せ付けられることもあり． ・友達とのかかわり方．集団での友達との遊び方など． ・社交性のあるなしが，他の子どもも同じくらいだと安心できた． ・体や心の発達について少し心配なことがあっても共感したりでき，私自身が楽になった． ・育児のリアルな話を共有することでストレスが減る気がした． ・悩み事を話せる相手ができてよかった（赤ちゃん返りのことなど）． ・子どもが言うことを聞かなかったり，貸したりできなかったりした時に，同じようだったりしてほっとした．違うものに目を向けさせればよいなど相談できた． ・病気の時の対応を先輩ママから聞けたり，遊びや言葉が遅い等の悩み事を話せたりして気持ちが楽になった． ・子どもはそれぞれなので色々な子どもやお母さんに出会って話ができたり，観察ができたりしたことで，自分ひとりで悩まなくなった． ・子どもとの付き合い方や子どもに寄り添ってあげることの大切さを学んだ． ・あまり細かいことを気にしなくてもよいと思った．
情報	・幼稚園の話などが聞けた． ・地域の情報を色々と教えてもらったりするので，慣れない土地での生活の不安が和らいだ． ・予防接種や子どもの病気等すぐに相談できる人がいるというのが心強い．成長していく上でのしつけや幼稚園の情報を相談しつつ，教えてもらえるところがうれしい．
その他	・悩みが減るということはないが，メンバーと話すことでリフレッシュできたり，参考になる話が聞けたりして気持ちが和らぐことは増えた． ・同じ年齢の子どもを持つ親同士，日ごろの悩みを話すことによって，たとえ解決できなかったとしてもストレス解消になった． ・悩みというより，小さなグチが多かったのですが，友達と話すことができて楽しいです． ・悩みはつき物だけど，悩みを共有してもらえるので気が楽になった． ・悩み自体は減りませんが，相談することで気持ちの整理ができたということはあります．

（インタービュー調査より作成）．

た．なお，今後のことはわからないと回答した人は30.2％であった．

以上のことからサークルの参加者は，既存のメンバーと顔見知りの親子が人と人とのつながりを介して，地域のなかで子どもと自分にとって居心地の良い場を創るためにサークルに参加していると考えられる．参加者は活動に積極的に参加しており，役割の分担も一つの経験として良い評価を下している．サークルへの参加は，子どもにとっては，同じ年代の子どもと交流し，自分以外の人とのつきあいを学ぶ第一歩として，親にとっては，自分の子どもに対する客観的な見方を養う，子育てのノウハウ・地域に関する情報を得る，子育て仲間を作り，会話でリラックスしたり，悩みを共感・共有する相互カウンセリングの場として役立っている．また，サークルへの加入は，家庭から出る機会が増えることにより，地域の人との交流を深めることにも役立っているようである．子育てサークルは，人と人とのコミュニケーションをベースとした地域づくりの一端を担う可能性をもつことが示唆される．

このように子育てサークルは，子どもにとっても親にとっても日常生活を営む上で必要不可欠な場となっている．特に子育てを母親自身のマンパワーに大きく依存せざるを得ない多摩区の子育て事情を考えると，子育てサークルの果たす機能は大きいといえる．ただし，サークルとの長期的な関わりについては，子どもの成長に合わせて関係を疎遠にする傾向がみられ，あくまでも自分の子どもがサークルに所属していることが参加の前提

表３　サークル活動に対する主な肯定的評価

子どもの成長	・おもちゃの貸し借りができるようになった.
	・お友達の名前を覚えられるようになった.
	・自分の子どもと同じくらい，または少し上の子と交流がもてた.
	・子どもが人見知りをしなくなった.
	・お友達と遊ぶ機会が増え，世界が広がった．男の子と遊ぶことで体を使った遊びを楽しむ機会が増えた.
	・子どもが公園で遊ぶことが好きになった.
	・就園前に他の友達との関わりを覚えることができる.
	・いろいろなお子さんとの交流が増して集団行動（幼稚園に入る）前の準備.
自分自身の成長	・他のお母さん方とお話しする機会を得られた.
	・子育て仲間が増えた.
	・親子だけで遊ぶより楽しい.
	・ママ友とのおしゃべりが私の発散になる.
	・子どもが日常とは違う場所で思いっきりお友達と遊んでいるあいだ，母たちは息抜きができる.
	・自分の子どもだけでなく自分の子ども以外の子どもたちの様子や成長を楽しみ・喜べる.
	・子育てで迷ったり，不安なところを仲間に話すことで自分にはない長期的な視野での意見が聞ける.
	・表裏なく良いことも言いにくいことも言い合い開き合える仲間を得た.
	・いろんなお母さんの考え方を知ることができる.
	・幼稚園に入園してからも同じ友達がいてスムーズに溶け込むことができた.
	・ご近所に友達がたくさんできた.
	・生活リズムができる.
日常生活・情報	・先生との活動があるので良い.
	・いろいろな遊びを知ることができる．情報交換ができる.
	・家だと子どもと2人きりで自分から積極的に参加していないとマンネリ化してしまう.
	・いろいろな場所，活動を一緒に楽しめること（サイクリング・登山など）.
	・違う幼稚園の情報等，たくさんの方の意見交換ができた.
	・先輩ママからいろいろな情報を教えてもらった.
	・イベント情報が得られるようになった.

（インタービュー調査より作成）.

である.

Ⅳ　子育てサークルの活動実態

Ⅲのアンケート調査から子育てサークルの基本的な性格を把握することができた．本研究では，さらに具体的なサークルの活動実態をさぐるため，代表者へのインタビュー調査と活動の参与観察を行った．ここでは，そのうちの結成や活動内容に際立った特徴が見受けられた 3 サークルの事例を取り上げ，子育てサークルの実態を明らかにする．なお，ここでの 3 サークルは表 1 中D，G，Hにあたる，各サークルの基本情報は表 1 を参照されたい.

１．Dサークルの活動

Dサークルは，1989年に多摩区と隣接する麻生区内の市営団地に住む母親たちが結成したサークルである．この団地は多摩区との境界付近に位置しており，現在は多摩区からの参加者が多いため，多摩区のサークルとして位置づけられている．対象は歩けるようになった子どもから未就園児までである．2010年度の当初は10組の親子が参加していたが，その後公園で一緒に遊んでいた 6 組の親子が入会し，調査時点の参加親子数は16組であった．最盛期には約70組の親子が在籍していたが，近年は減少傾向にある．毎週木曜日が活動日であり，団地の集会所と近隣の街区公園を中心に活動している．また，遠足やクリスマスなどのイベント時は，麻生区内の総合公園や多摩区の教会で活動している.

このサークルでは，当初は工作をメインの活動にしていたが，現在は公園遊びや季節行事，遠足などを月に 1 回ずつ行っている．工作は，参加者

数の減少にともない事前準備や当番の負担が大きくなったため，減らす方向でいるという．年間の活動計画は，昨年度のものを参考に年度はじめに全員で決めている．また，活動費の確保のためにバザーを年に 1 度開催している．以下では，D サークルの公園遊びとバザーの状況を紹介する．

①公園遊び　　街区公園で午前中に行われた公園遊びを観察した（2010年11月 4 日実施）．当日は 8 組の親子が参加しており，はじめに円になって出席確認（歌）を行った．出席確認は，「○○ちゃん，○○ちゃんどこでしょう？」，「そこです，そこです，あそこにいます」，「はーい」という，メロディーにのせて行われる．その後，誕生日をむかえる子どもに，全員で誕生日の歌を歌い，当番から手作りのメダルが手渡された．

公園には各種の遊具があり，子どもたちは各自好きなところで遊んでいた．滑り台やブランコは，小さい子どもが一人で遊ぶのは危険なため，親子一緒に遊んでいた．砂場では，親が砂場の周りにいて，「○○ちゃん，こんなこともできるようになったのね！」，「すごいね！」，「そっか，もう 2 歳になるのね」，「最近，言葉を覚えました」など，終始子どもの成長に関する会話や，「あそこには○○幼稚園がある」，「△△幼稚園は人気殺到らしい」など，地域の子育て情報を交換して盛り上がっていた．終了時間（12時）が近づくと，砂場遊びの道具の片付けと砂場用の網をみんなで協力して張った．解散前には，次回の活動についての内容が伝えられていた．

②バザー　2010年度のバザーは，11月18日の午前中に団地集会所で実施された．当日は全てのメンバーが会場整備（商品の整理整頓など）に携わるとともに，会場案内や会計などの各種業務を分担していた．品物は子ども服が 9 割を占め，値段は50円から300円程度であった．

会場には，常時15組から20組くらいの親子が訪れており，2 〜 3 組で一緒に来る親子が多かった．来場者は，会場まで徒歩で来ることのできる近隣の範囲に住んでいることがインタビューからわかった．例年，バザーをきっかけに D サークルの存在を知り，その後，活動見学に来る親子がいるという．バザーはサークルを知ってもらう機会にもなっており，広報活動としても役立っている．

代表者によると，洋服やおもちゃを処分せずにバザーまでとっておいてくれるなど，卒会者が毎回品物をたくさん提供しており，卒会者なくしてはバザーの実施はあり得ないという．バザーは，卒会者との「縦のつながり」によって支えられている．そのなかには卒会者も含まれており，卒会者と現メンバーや卒会者同士が集って会話をする機会にもなっている．また，必ずバザーに訪れて買い物をする地域の常連も多く，ゆえに，このバザーは多少なりとも地域に根差したイベントになっているという．

2．Gサークルの活動

約10年前に結成された G サークルは，毎月第 1 ・第 3 月曜日に多摩区南西部のこども文化センターと街区公園を中心に活動しているサークルである．対象は歩けるようになってから未就園児までであり，2010年度当初の参加親子は 5 ・6 組であったが，調査時点では15組まで増えていた．年間の活動計画は年度のはじめに決定しており，活動はリトミックを中心としつつ，絵本読みや季節行事，遠足などにも取り組んでいる．以下では，こども文化センターで行われている G サークルのリトミック活動（2010年12月 6 日実施）を紹介する．

当日の活動内容はリトミックと絵本読みであっり，10時過ぎに 8 組の親子がこども文化センターの遊戯室に集まった．遊戯室は，子どもが走り回ることのできる広い部屋である．最初は，音楽がかかる中，準備運動を兼ねて親子が室内を走ったり，歩いたりしていた．音楽に合わせて，声を出しながら親子で目と目をあわせたりする姿もみら

れた．その後，2組の親子が遅れて参加してから，全ての親子が円になり，名前呼びの歌がはじまった．また，子どもが2人は乗れそうな大きな布の両端を親がもち，布のなかに子どもを入れて，ゆらゆら右に左にとゆらしながらゆりかご遊びをした．

その後，子どもたちが体を動かすことに徐々に集中力がなくなってきたのを察知した代表者が休憩の指示を出した．休憩時には，親同士で「大きくなったね」，「すごい，一人で飲んでる」などの会話をしていた．休憩の後は，親子が円になって座り，歌遊びをした．その後，読み聞かせとして，副代表が絵本をみんなに読み，当日の活動は終了した．活動終了後は，次回行うクリスマス会の話し合いとなった．

3．Hサークルの活動

Hサークルは，多摩区の南東部を中心に活動している．対象は，これまでのサークルと同様に，歩けるようになった子どもから未就園児までである．活動日は毎月第2・第4木曜日であり，こども文化センターや市の植物園で主に活動している．このサークルは約30年前に結成されたが，2009年度末には参加親子が3組まで減少したため，次年度に他のサークルと合併した．合併は，両方のサークルに加入していた親の働きかけがきっかけであった．その結果，2010年度の当初は8組の親子でスタートすることができ，その後は15組まで参加親子が増えた．

Hサークルでは，主に公園遊びや室内遊び，季節行事に取り組んでいる．また，警察に依頼しての交通安全教室や地域子育て支援センターの保育士を呼んでの室内遊び（月1回）などを行っている．2010年12月9日にこども文化センターで行われた室内遊びを紹介すると，当日の活動は，保育士による冬場の栄養管理と感染性胃腸炎，予防接種の話からはじまり，あいさつの歌，親子で一緒にできる遊び歌，クリスマス飾り作り（画用紙と折り紙を使ってクリスマスツリーを作る），エプロンシアター（保育士がエプロンを着て，歌に合わせながらエプロン上で登場人物を使って芝居をする）が行われた．活動終了後には，保育士と相談をしているメンバーもみられた．

このサークルの他の活動（例えば工作）では，自分たちで活動を仕切っているため，進め方が比較的ゆったりとしていて，それぞれの自由度が高い感じがした．しかし，保育士との活動は，コンスタントにプログラムをこなし，保育士の指示についていくという「集団行動」を体験しているように思えた．

4．事例サークルの活動実態とその特徴

以上3つのサークルは，それぞれ違った特徴をもっていた．Dサークルは，歴史が長いため活動の蓄積があり，参加者の役割分担のもとで安定したサークル運営が行われていた．また，卒会した親子との「縦のつながり」が強いサークルであった．今後，このサークルが活動を続けていく限り，そのつながりは上下の世代に広がっていくものと思われる．子どもが幼稚園や小学校に通いはじめてもDサークルの出身であることをきっかけにして，同じ地域のなかで人と人とがつながることもあるだろう．例えば，Dサークルを卒会した母親がハロウィンを毎年地域で企画しているという．

Gサークルは，リトミックという明確な活動目的が存在するサークルであった．活動目的がはっきりしていることによって，メンバーの参加意欲が増し，目的の達成感を味わうことができていると考えられる．リトミックが子どもをもつ親にとって人気があることからも，習いごと感覚で参加でき，なおかつ同じ年代の子どもをもつ親同士で子育てに関することなど，さまざまな情報共有をすることができるメリットは大きいだろう．また，このサークルでは特定の施設を拠点に活動しているため，活動の機材や道具は施設に置かせて

もらっている．そのために準備の手間が小さく，当番の負担も少なくて済んでいる．

Hサークルは，活動継続の危機を，参加者がもつ別の子育て仲間のネットワークで乗り越えたサークルであった．一つのサークルに参加すること以外にも，さまざまな活動に自らが足を向けていたことがサークルの危機を救ったといえる．また，子育てサークルが終了してしまうことは，地域の子育て資源が失われてしまうことになるため，合併という選択は自分たちにとっても後に続く親子にとっても最善だったに違いない．

さらに，こうした違いに加えて，ここで紹介できなかった6サークルを含めた全てのサークルにいえることは，サークルの運営にあたって参加者全員が互いに顔と名前を覚えることができ，全員が何かしらの役割を担い，運営に参加している状況を作り出すには適切な参加者の規模があり，それは10組から15組程度の親子だということである．インタビューのなかでも，「多すぎても良くない．誰が誰なのかわかるくらいの方がお互い仲良くなれる」，「昔（最大時）に比べて人数が減ったことに関しては，そこまで深刻に考えてはいない．むしろ，今の人数の方が運営しやすい」という意見が聞かれた．

V　おわりに

本研究では，住民が主体となって取り組む子育て支援の一つである子育てサークルについて，川崎市多摩区の事例からその活動実態と子育て支援における役割を明らかにした．最後に本研究で得られた知見を整理した上で，子育てサークルの継続性に関する課題ならびに子育てのためのコミュニティ形成との関係について論じる．

1．子育てサークルの役割

本研究の結果から，子育てサークルには3つの役割が期待される．それは，①子どもの人間形成，②親の自己成長，③相互カウンセリングである．

①については，子育てサークルは子どもの成長の場となっている．参加者から，「おもちゃの貸し借りが出来るようになった」，「友達の名前を覚えることが出来るようになった」，「子どもが公園遊びを好きになった」，「人見知りをしなくなった」，「幼稚園入園前に集団行動に慣れさせることができた」などの評価が聞かれたことからも，子どもの人間形成に対する期待感が読み取れる．

②については，子育てサークルが参加者の共同により運営されている組織であることと関係している．つまり，子育てサークルは，さまざまな価値観や立場の親が参加して運営されており，一緒に活動をすることで自分とは違った価値観を受け入れ，子育てに対する自分の考え方や子育てという枠を越えたものの見方を身につけることができる．子育てサークルは，こうした親の自己成長の場としての役割をもつと考えられる．

③については，「子育ての悩みはつきない，相談できる場所があることが大切」，「日ごろの悩みを話すことによって，たとえ解決できなかったとしてもストレス解消になった」という参加者の意見から，互いの悩みを共有し，また共感することで，問題解決の糸口を発見する役割が子育てサークルにはあると考えられる．

以上のことは，子育てサークルだからこそ実現できる役割と考えられる．行政からの押し付けではない自主的な組織で，参加者が共同で運営するからこそ，親子にとって居心地の良い，さらにそこでの経験から自己成長できる場を創り出すことができている．地域の子育て支援には，行政やNPO法人が主体となって子どもとその親のために子育て講座や遊びの場を提供する子育てサロンや子育てひろばという取り組みもある．しかし，それらは毎回参加者が変わるため，子育てサークルのように子育ての悩みを相談できるような親密な関係を創ることは困難であろう．子育てを一家庭

で終わらせず，地域社会全体で取り組む姿勢が求められているいま，子育てをしている人たち自身が主体的に運営している子育てサークルは，地域における子育て資源として非常に重要な役割を担っているといえる．

2．子育てサークルを継続させるために

地域の子育て資源として子育てサークルを今後も継続させていくためには，以下の 5 点が必要とされるであろう．

①子育てサークルは，10組から15組の親子からなる小規模な組織で運営すべきである．参加者同士の意思疎通や主体的な運営への関わりを維持するためには，「多すぎず少なすぎず」という適切な規模の参加者を確保する必要がある．子育ての悩みを相談したり，子育てに関する情報を共有したりできることがサークル加入のメリットでもあるため，それが可能なサークル規模の実現が大切である．

②卒会者との「縦のつながり」の強化も大切である．本研究の事例サークルでは，卒会者を巻きこむかたちでのイベント開催が，子育ての枠を越えた地域づくりに寄与していた．卒会者との連携・協力は，活動内容の幅を広げ，サークルの広報活動や情報交換にも有効である．さらに，地域で子育てを続けていくための人と人とのつながりを維持することができる．

③他サークルとの交流の場を設けることも重要である．交流によって，活動内容や活動場所に関する情報を交換できる．また，本研究の事例サークルでみられたように，今後単体でのサークル運営が難しくなった時，他サークルとのつながりがあれば，合併などによって活動継続の可能性を見出すことができる．多摩区では，多くのサークルが社会福祉協議会の母親クラブに加入していたり，同一のこども文化センターを複数のサークルが活動場所として使用していたりするため，相互交流の機会を設けることは難しくないと考えられる．このことに関しては，行政や社会福祉協議会の協力も必要である．

④特色のある活動内容をもつことが望ましい．事例となった G サークルの参加者からは「リトミックができるから参加した」という声が聞かれた．このように，参加者の確保にあたり，「外遊びを活動のメインにする」，「毎年必ずバザーをする」などの特色ある活動を取り入れることが有利になる．

⑤活動場所の確保が重要である．子育てサークルは，自主的な組織であるがゆえに，活動場所も自分たちで探さなくてはならない．多摩区では都市公園やこども文化センターなど自由に使用できる場所が比較的多いため，活動内容にあわせた活動場所の選択ができている．しかし，活動場所の資源が乏しい地域では，その確保自体が難しいだろう．活動場所の基盤整備を子育てサークルに求めることも難しい．したがって，子育てサークルの役割を理解し，活動場所の整備と提供に努める姿勢が行政などの機関には望まれる．

3．子育てのためのコミュニティー形成に向けて

地縁的なつながりが希薄化するなかで，子育ては一家庭で終わらせるものではなく，地域社会全体で取り組むべきものと考えられるようになった．世代や立場を越えた，人と人とのつながりのなかで子育てができることは，知らない土地において一人で子育てをする親の不安感や孤独感を軽減させるであろう．また，子育てを地域ぐるみで取り組むことで，その再構築にもつながると考えられる．その点，子育てサークルは，子育てを介して地域の再構築を担う大きな可能性をもっている．本研究で明らかになったように子育てサークルへの加入は，同年代との交友関係の拡大はもちろんのこと，地域の人との交流を深める効果がある．子育てサークルは，卒会者や保育士，行政，自治会などさまざまな地域の人たちを巻き込みながら活動しており，地域づくりの一つの拠点とな

ることができるのである．

今後，ますます少子化が進み，子どもと子育てを取り巻く環境はさらに変化していくだろう．家庭レベルでは限界があり，行政レベルの取り組みでもカバーしきれない子育てに関わる問題が発生するかもしれない．その時，住民たちの自主性に基づく子育てサークルのような取り組みは，地域やそこに住む人たちのニーズに柔軟に対応できる支援策として役に立つに違いない．住民同士だからこそできる，きめ細かなサポートが，子育て中の親たちと子どもを救ってくれるのである．

付記

本稿を作成するにあたり，多摩区の子育てサークルの皆様，多摩区役所市民館の牧田様，ままとんきっず有北様をはじめとする多くの皆様から調査にご協力をいただきました．心からお礼申し上げます．また，お茶の水女子大学の宮澤仁先生ならびにゼミの先輩に感謝いたします．前向きに卒業論文に取り組むことができたのは，一重に先生のおかげです．先輩の皆様にも，多くの助言をいただきました．本稿は，2010年度にお茶の水女子大学大学文教育学部人文科学科地理学コースに提出した卒業論文を加筆修正したものであり，研究の骨子は，日本地理教育学会主催の2010年度全国地理学専攻学生卒業論文発表大会（2011年 3 月東京学芸大学．東日本大震災の発生により中止となったが発表の認定を受けた）ならびに2011年度お茶の水地理学会（2011年 6 月お茶の水女子大学）において発表した．

文　献

大東貢生・長光太志・井上未来　2005．自主的な市民活動としての「子育てサークル」－当事者活動による社会変容の可能性に向けて（ 1 ）．社会学部論集 41：75-88.

小木美代子　2000．1980年代後半から顕在化する新しい子育て・子育ちグループの誕生とその背景．小木美代子・立柳　総・深作拓郎編著『子育ち学へのアプローチ』38-51．エイデル研究所.

厚生省　1998.『厚生白書　平成10年版－少子社会を考える：子どもを生み育てることに「夢」を持てる社会を』ぎょうせい.

住田正樹・溝田めぐみ　2000．母親の育児不安と育児サークル．九州大学大学院教育学研究紀要 3：23-43.

武田祐子・木下禮子編著　2007.『地図で見る日本の女性』明石書店.

多摩区子育て BOOK 編集委員会・NPO 法人ままとんきっず　2008.『多摩区子育て BOOK 2008年改定版』川崎市多摩区役所こども支援室.

寺田恭子　2005．子育て支援から子育てコミュニティ創生に向けての課題－子育てサークル調査をふまえて．子ども社会研究 11：61-74.

原田正文・福井聖子・服部祥子　2002．現代日本における子育て支援方策に関する研究（第 I 報）－関西地域における「子育てサークル」に関する統計的調査．大阪人間科学大学紀要 1：69-74.

よしえ・あすな（59回生）
板橋区立成増ヶ丘小学校

A Study on the Characteristics and Continuity of Parents Circles for Child Care in Tama Ward, Kawasaki City

YOSHIE Asuna（Narimasugaoka elementary school, Itabashi ward, Tokyo）